読書療法の可能性

～養護施設での読みあいを中心に～

村中李衣

覚書：養護施設における読書療法・その意味を考える

ここ一年半、週一回ずつ、養護施設の子どもたちに私流の読書療法、（一対一での絵本の読みあい）を実施している。対象年齢は、五歳から十五歳まで。そして、三歳児から五歳児には、別に、五人一組で、こちらは、読みあいというよりも、読み聞かせというかたちでのセッションをやはり週一回、行っている。入所児に親との死別は少なく、ほとんどの子どもが、放置、虐待の傷をおっている。門脇厚司氏のいう「社会的原基」が育てられなかった子どもたちである。しかし、一年半の試みの中で、明らかに子どもたちの対人的な関心度が高まってきたことを感じている。表情に活気がもどり、人のことばを待つ「間」をもつ自信というか自分への信頼感のようなものが感じられるようになったのだ。他者への信頼という意味では、ひとたび親や親戚関係の話になるとサッと心を閉ざし、自分の存在を消そうとするので、「他者一般」と普遍化はできないが、少なくとも、「りえさんと関わる自分」への信頼感が育ちつつあることを感じる。セッション初めのころ、子どもたちは、時に寡黙で、時に機関銃のようにしゃべりまくる、ということのくりかえしであった。だから「五感、とりわけ耳を通した感覚が育っていない」というのが、私の印象だった。そこで、外からの深い関わりを恐れる子どもたちに、まずは、自分の声を、自分の発したことばを、聞いてもらおうという目標をかかげて読みあいのプログラムを重ねた。その具体的な方略として、かかさず行っていたのが、表情のある「母親語」を用いた絵本読みと、それに対して返されてくる子どもたちの「信号のようなことば」をききもらさず、なるべく正確にゆっくり反復し、それを茶化さず、批判もしないまま、子どもの耳に届けることだった。あなたが投げた「私へのボール」として、その投げられたボールの道筋をスローモーションビデオでみせるような感じで。

ところで、母親語とは、アメリカの人類学者チャールズ・ファーガソン教授が造った新語“motherness”に動物行動学者・正高信男氏がつけた訳語である。恥ずかしながら私は、門脇厚司著『子どもの社会力』（岩波新書）の中で、母親語の重要性がその後の社会力獲得の過程と関連づけて紹介されるまで、その存在を知らなかった。しかしながら、ファーガソン氏が示した母親語の特質：①ことさら声の調子（高さ）を高くする②同時に、声の抑揚を誇張する、は本

来母が子に語りかけることばを指しているのだが、それは、そのまま、施設の子どもと読みあう時に私が無意識に用いていたことばの特質と一致していた。

数カ月すると、子どもたちは、反復された自分のことばに驚いたような表情をみせ、同時に対峙している私の表情の中に、非難、侮蔑、攻撃が表れていないことをすばやく確認し、ほやっ、と照れたようなしぐさをする、ということがくりかえされるようになった。この照れたようなしぐさが現れ始めたとき、（あ、自分の声がきこえてきたんだな）と私は解釈した。そうして、その機を捉え、物語世界へ今度は「母親語」でつなげていく。子どもたちは、私の、物語への親密なまなざしを、その声で感知し、つられて自分も物語への親密なまなざしをもち始める。・・・少し乱暴な推論であるが、「子どもに向けての母親語」から「物語りに向けた母親語」へのスライド。それを子どもが追っかけて「視覚的共同注視」が実現されていく、ということだったのではないだろうか。一般に他人の心を理解する能力の始まりとされているのは「赤ちゃんとおかあさんの視覚的共同注視」であるが、施設の子どもたちにとって、奪われた社会力（奪われるのでなく持ち得なかったの方が正確かもしれない）を手に入れる重要な手掛かりのような気がする。一年半というスパンの中で顧みると、これは、意外にも十二歳くらいまで、否、たいへんな労力を必要とはするものの、中学生にも、それ以上の年齢においても、ある程度可能なことであった。

また、半年くらいたつと、子どもたちが「足の親指いたかったけれど、もうなおったよ」とか、「ここのところ切ったけど、もうだいじょうぶ。」というように、メモや報告をしてくれることが多くなってきた。「けがをした」「なぐられた」「熱がでた」というような、弱さによる自己顕示はかなり早くからみられたが、それに加えて、「もうだいじょうぶである」ことを知らせようとする姿の中に、「他者の気を引く」だけでなく「他者を安心させる」というような、他者の心の動きを意識し始めたことがうかがえる。「・・・どんな教育をするにせよ、効果をあげるためにまず必要なことは、彼女がだれか一人の人間に強い依存的な愛着をもつようになること、その人と一体感をもち、その人を喜ばせることに関心がもてるようになることだと信じています。」（ライマー著、片山陽子訳『隔絶された少女の記録』）の一文が、自分の読書療法実践の場面に照らし、実に切実に、胸にひびく。

さて、去年の夏のことである。いつものように、子どもたちとの読みあいを始めようとした私は、愕然とした。子どもたちの声がいつもより一オクターブ高く、妙に早口なのである。そして、私の絵本を読む「生の音声」が、届いていかない、すうっと擦り抜けていくような感じがする。まるでそれは、一年半前に逆戻りしたようなひどいありさまだった。それも、やってくる子やってくる子みんなのである。仕方なく絵本をいったん置き、ゆっくりゆっくり会話を重ね、どうやら日常の対話レベルに降りて来てくれたかなというところまでたどりつくのに、二十五分から三十分近くかかった。あとできいてみると、一週間前に、子どもたちの強い要望で、施設がプレイステーションを購入し、子どもたちはその一週間、集中的にテレビゲームをし続けていたことがわかった。その、なんともいえ

ない「ぶきみさ」が強烈で、ゲームの刺激が実際に子どもたちの対話能力をどのように奪うのか、実験したいと、考えている。その手掛かりとして、ゲーム終了後の音声の高さと発話速度を、日常でのそれと比較してみたらどうだろうかと、具体的にその実験設備を整えるには、どういう機関に協力を求めればいいのだろうかと、思い巡らしてもいる。そのことによって、また、「読みあい」で生の声を届けあうことの意味も新たに浮かび上がってくるような気がする。ともあれ「絵本の読みあい」がなぜ子どもたちの心をひらくのに力をもつのか、絵本を仲立ちとして、その空間に、私と子どもたちのあいだに、どういうことが起こっているのか、そのことを論理的にみていく方法論をこれから模索していきたいと思う。

以下は、読みあいの実践の記録である。こちらは、一冊の絵本を赤ちゃん、じいちゃんばあちゃん、養護施設の子ども、という違う対象と読みあって生まれた「場」を再現したものである。併せて、興味深い反応の見られた養護施設での「読みの場」も再現した。読書療法の本質を掴んでいくためには、覚書にも記したように、論理的考察と、その「場」に立ち会い続ける者として「私」が何を感じ、何を渡し、何を受け取ったかを主観的に書き留めていく両方の作業が必要と考えるからである。

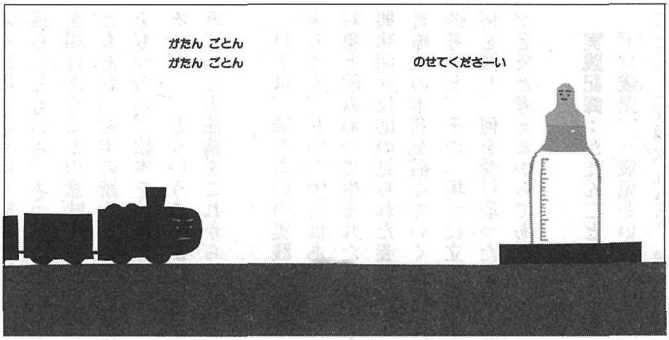
実践記録：がたんごとんがたんごとん・・なつかしい旅のゆくえ

ゼロ歳児、一歳児といっしょに、なんどか『がたんごとんがたんごとん』（安西水丸さく　福音館書店）を読みあう。声に出し、ページをめくりはじめた瞬間から、読み手も、聞いている子どもたちも、魔法にかかったように、遠い遠いなつかしい場所につれ去られていくような感覚におそわれる。いわゆる「赤ちゃん絵本」の多くが、読み手に、「大人としての観察眼と、大人としての子育ての満足感」を

与えようとするのに対し、この絵本は、「大人として身につけてきた速度」を無効にさせる。「がたんごとんがたんごとん」と声にするうちに、私は、ながくながくゆるやかにひかれたレールを感じ、だれとでも、ひとりでも、そこを揺れながら進んでいく。私は、汽車なのか、乗客なのか、運転士なのか、それとも・・・。読みあう子どもたちは、汽車なのか、乗客なのか、運転士なのか、それとも・・・。

内表紙、三両の貨車をひく貨物列車が中央に描かれる。本ののどをはさんで、それも少し右寄りに。黒い車体の先頭に、前方（ページのめくられる右方向）だけをにらむ、まじめな顔が描かれる。この汽車は自分の意志を持ってもう走りだしているのだ。

「がたんごとんがたんごとん」と汽車の走る音を感じながらペー



ジをめくる。見開き左端に、汽車の車体前方部分だけが現れる。（ああ、ここまで走ってきたのだ）と一瞬で了解する。前ページから「ここまで」のみちのりは、「がたんごとんがたんごとん」の音がみせてくれた音のレールの距離だ。右端に、茶色の長方形。駅にみえる。駅に乗客がひとり。哺乳瓶が、汽車に届くのにちょうどいい声で「のせてくださーい」子どもたちは、きまって、ゆるやかにおおらかに、答える。「いいよー」読み手の私は、聞き手のこの声を、まるで、汽車という、私のからだの声のように受け入れる。「ありがとう」。私の口をついて出るこのことばは、哺乳瓶の感謝のことばの代弁なのか、汽車をひっぱる仲間としての共感の声なのか。判別できぬまま、ふたたび速度をあげて走りだす。「がたんごとんがたんごとん」

ページをめくると汽車はしっかり哺乳瓶を乗せて、画面中央を「がたんごとんがたんごとん」と、走っている。子どもたちの誇らしそうな顔。先頭の汽車の顔がいくぶんほころんでいる。「がたんごとんがたんごとん」明るくなった自分の声を私は聞いている。

「がたんごとんがたんごとん」ページをめくると、左端に汽車の車体前方が現れる。右端に赤いコップと灰色のおさじさん。ああ、次の駅まで走ってきたのだ。「のせてくださーい」。子どもたちの「いいよー」の声。「がたんごとんがたんごとん」汽車はまた、速度をあげる。

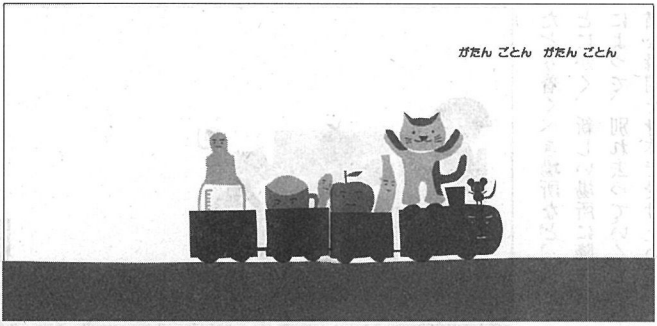
ページをめくると汽車はしっかり哺乳瓶と赤いコップとおさじさんを乗せて、画面中央を「がたんごとんがたんごとん」と走っている。少し重くなった貨車をひいて、私は「がたんごとんがたんごとん」と進む。ふいに、この汽車はお客を乗せて走っているけれど、お客たちを乗せるために走っている訳ではないことを確信する。そういえば、「のせてくださーい」のことばに、子どもたちはだれも「はいどうぞ」と言わなかった。「いいよー」と言っていた。自分の旅の途中で、出会った者たちを許容しただけなのだ。しかし、乗せたからには、それなりの責任感をもって慎重に「がたんごとんがたんごとん」。子どもたちの真剣な表情が汽車の表情にかぶさっていく。

「がたんごとんがたんごとん」ページをめくると、左端に汽車の車体前方。そして、右端の方を見やると、やっぱり。駅に赤いりんごと黄色のバナナが待っていた。「のせてくださーい」子どもたちはやれやれといった、それでも決して嫌そうでない「いいよー」の声。画面の右端から左端へ。駅のホームから、近づいてくる汽車へ。ちょうど届くほどの声が、読みの場を満たしていく。「がたんごと

んがたんごとん」　ページをめくると、どの車両にもどの車両にもお客を乗せた汽車が、堂々と画面中央を走っている。まだしっかりと首のすわらない子どもたちも、吸い寄せられるように画面を見入っている。それも、画面を静止させない見守り方をしているのが、肌で感じられる。満杯になった、百パーセントの画面は、読み手にも聞き手にも、幸福のすぐ次に待ち構える「なにか」を予感させる。でも、走りだした汽車は止まらない。「がたんごとんがたんごとん」

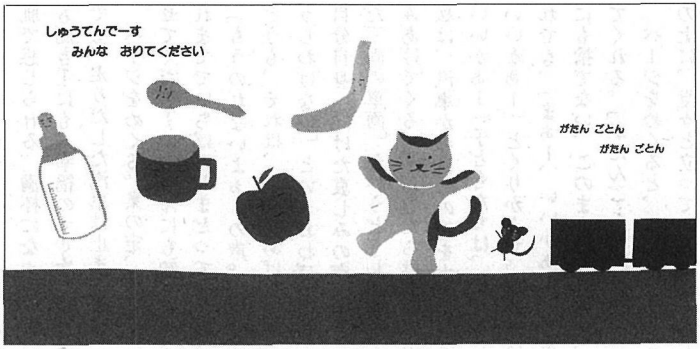
ページをめくる。案の定、ホームに待っているネコとねずみ。「のせてくださーい」なんにも知らずに、手をあげて。汽車の顔が、これまでいちばんとまどっている。子どもたちの、ささやくような「もうのれないよぉ」の声。「いっぱいだよう」心から困った声。どうも、それは、乗せてあげられそうにないネコとねずみへの「もうしわけない」というおわびの声でなく、「のせてあげられない」自分自身へ向けた哀しみの声のようだった。この時初めて、「たった三両の車両」というどうしようもない己の小ささへの哀しみがこみあげてくる。子どもたちは完全に汽車と一体になっている。急に私は、汽車から自分の魂を大人の方へずらしてしまう。「まぁー、いいかぁー」子どもたちは、ハッとしたように私を見上げ、「まぁー、いいかぁー」とくりかえす。解決策はみつからないままなのだ。それでも、「まぁー、いいかぁー」の声は、なぜか、大きな安堵（なにも捨てない、このまま、とにかく、みんなですすむ）をもたらしてくれる。「がたんごとんがたんごとん」

ページをめくると、なんとまあ、ネコとねずみは、先頭の機関車の上に、堂々と立っているではないか！子どもたちの（ああ、この方法があった）という、なんともいえぬ安堵の表情。そして、それは、あっというまに、スリルと興奮に満ちた自分の冒険にすり代わる。立ち上がる子、ネコとねずみといっしょに万歳をして揺れる子、たった今まで汽車だった子どもたちは、もう、先頭に立つ勇敢な乗客に成り代わっているのだ。私は、満杯の客を乗せ、ひとり静かに満ち足りた思いで走り続ける。「がたんごとんがたんごとん」

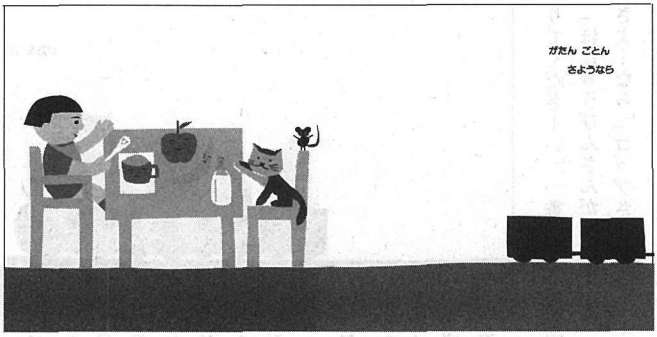


ページをめくると、車両は、見開きの、一番右端に描かれている。「がたんごとんがたんごとん・・・ぴたっ」指で引いた線路の上をまっすぐに列車は走り、右端まで来て「ぴたっ」と止まる。

「しゅうてんでーす。みんなおりてくださーい」一番うしろの車両から順に客たちは降りていく。「ほにゅうびんさんが、ぽぉーん」「どうもありがとうって」「はい、さよーなら」「コップさんが、ぽぉーん」「どうもありがとうって」「はい、さよーなら」「おさじさんが、ぽぉーん」「どうもありがとうっ



て」「はい、さよーなら」・・・乗客ひとり残らず延々とくりかえされるこれらの台詞は、テキストにないまったくのアドリブである。が、これは読み手としての「見送りの儀式」であり、聞き手の子どもたちにとっては、物語の中心から降りていく「立ち去りの儀式」でもあるようで、両者とも、省略を許さず、やけに丁寧に「ぽぉーん」「ありがとう」「さよーなら」を交わしあい続ける。　最後にネコとねずみが「とん」「とん」と地面に降り立つ。着地の音が、引き締まる。子どもたちの中に、（ああ、なにかの時間が終わった）という了解が生まれる。それを見届けてから、汽車は、「がたんごとんがたんごとん」と、静かに遠く遠くへ走り去っていく。汽車から降りた子どもたちは、ぽかんとして、走り去っていく汽車をながめている。ずうっと、放心したように、姿が消えてもなお、汽車の遠い「がたんごとんがたんごとん」を聞いている。



さて、作者安西水丸は、最終場面で、見開き左側に、子どものいる食卓風景を描いている。子どもの手にはおさじさんが握られ、テーブルの上には、哺乳瓶、コップ、りんご、バナナ、そして、子どもの向かい側の椅子には、ネコとねずみ。この絵から察するに、汽車を待っていた彼らの目的地は、どうやらこの食卓だったらしい。しかし、この解釈は、読みあっている時の私と子どもたちの間には成立しがたかった。「がたんごとんがたんごとん」と走り去っていく汽車を見送る子どもたちの立っている場所は、今線路から降り立ったばかりの、ひどく不確かな場所であり、彼らはまだ、たどり着くべき場所など、持とうとしておらぬ気がしてならない。とにかく、新しい場所に降り立ったということ。そして、そのことによって、別れ去っていくものがあるということ。そんな人生の厳粛な瞬間を身体で受け止めていたのではないか。最後のページで、

目的地に至るものがたりと、不定の地にたたずむものがたり。「読み」は、作り手のものがたりを、離反してしまったようだ。

読み手は、さらに、裏表紙に施された作者のサービスを退け、なおも、かすかな「がたんごとんがたんごとん」の音を聞いている。綴じられた絵本は「がたんごとんがたんごとん」の音といっしょに、遠く遠くへ消えていく。静けさが、部屋全体を包み込む。

この絵本のなつかしく甘い気持ち良さの理由は「がたんごとんがたんごとん」の母音「aan, oon, aan, oon」という、喃語に近い音の響きにもあったのではないかと思う。身体全部で世界と交信していた頃の自らの声をも、この絵本は呼び起こしてくれた。このこともまた、この絵本が、赤ちゃん絵本といったジャンルにおける読み手の新しい関わり方を開いてくれたひとつの要因ではなかろうか。

実践記録：がたんごとんその後（一）

『がたんごとんがたんごとん』と、赤ちゃんとのあいだで作られる読みの空間について先にのべた。さて、この絵本は、別の読者層とも、特別な空間を作り出していった。

お年寄りとベッドのそばで、『がたんごとんがたんごとん』を読みあう。じいちゃんばあちゃんたちにとって、ホームで汽車を待つ哺乳瓶やりんごやバナナはまさに、助けの手をさしのべずにはいられない幼きものたちであった。彼らの「のせてくださーい」という台詞に立ち会ったとき、そこはもう、「のせるか否か」の判断の場所でなく、「はやく安全にのせてやらなければ」という心くばりの場所であり、久しくなかった、「世話をやいてやれる」場所となった。

「おうおう、はようこっちへこい。さあ、はよう」と口にするおばあちゃんもいた。そうしてページをめくると、貨車の最後尾にすっぽりおさまっている哺乳瓶の絵。これを見届けた時のなんともうれしそうな表情。「おお、おお、それでよし。ぽっくりこんと、肩まで入っちょけよ。」とまるで湯船につかる孫をみているようなおばあちゃん。「ほれ、立っちゃあいかんぞ。」と、画面に手を差し伸べ、乗客である哺乳瓶の身の安全を確かめるおじいちゃん。汽車の「がたんごとん」という音は、自分を頼りにする者たちの命を預かり守って進んでいく誇らしい響き。そして、ひっぱる貨車の重さは、自分の存在価値を確かめるひとつの証し。じいちゃんばあちゃんたちが率いる『がたんごとんがたんごとん』の汽車は、ゆっくりゆっくり、生命の風を受けながら進んでいく。また、この「がたんごとん」というゆっくりしたスピードは、じいちゃんばあちゃんたちの、かつての旅を具体的に思い出させてもくれるらしい。「ああ、そういえばむかし、夜行列車に乗って東京まで行ったことがあったよ。とちゅうで、材木屋さんの、なんちったっけなぁ・・・おもしろいだんなに会って、そりゃ、ゆかいな旅だったが・・・はぁて、あの方も今頃達者でおられるかどうかねぇ・・・」などと、ものがたりから離れ、自分の夜行列車を再び走らせる人もいる。そういう、途中下車やひとやすみを許容する絵本でもあるらしい。

実践記録：がたんごとんその後（二）

養護施設にいるK子と『がたんごとんがたんごとん』を読む。K子は十一歳。母親はK子の養育を放棄しているが、彼女には自活し

ている姉がいるため、帰省を促されるお盆や正月には、その姉の家へ行くことが多い。しかし、彼女を受け入れる環境は、決して良好とはいえず、こづかいをせびりに、隣家に忍び込むような生活。そのため、帰省後施設にもどってくると、一、二週間不機嫌で、落ち着かない様子が続く。これは、K子に限らず施設に入所している子に共通した傾向ではある。

さて、K子と『がたんごとんがたんごとん』を読んだのは、そういう最も心の不安定なお盆明けのことであった。「がたんごとんがたんごとん」といいながらページをめくり、「のせてくださーい」という哺乳瓶の声に、K子は即座に「だめっ!」。おもわず私は「えっ?」と問い返す。「だめ?」「うん、あたりまえ」。いたずらや、乗せてあげるつもりなのにわざと「だめ」といってみせるのとは、雰囲気が違う。そのままページをめくると、一番後ろの貨車に、哺乳瓶は、ちゃっかり乗っている。K子はキッとした顔で「降りな!」と、その哺乳瓶を指ではじきだそうとする。「いいじゃない。のせてあげなよ」といいそうになるが、そのことばをのみこんで、次のページへ。今度は赤いコップと灰色のおさじさんがホームに立っている。「のせてくださーい」の声もきかず、K子は赤いコップに向かって「あんたはだめ」灰色のおさじさんに向かって「あんたはいいよ」。次の乗客のりんごとバナナにも「あんたはだめ」「あんたはよし」。そして、最後のホームで待っていたネコとねずみには、ふたりとも、「だめ!だめ!」。ところが、K子がいくら、乗客をより分けても、みんな、信頼しきったような顔で列車に乗りこんだ。そして「がたんごとんがたんごとん」といっしょに旅を続けたのだ。

「しゅうてんでーす。みんなおりてくださーい。」と私が声をあげる。乗客たちはみんなみんな、ぽーんと貨車から降りて、にらんでいるK子に向かって、「ありがとう。さよならー」と手を振る。K子が拒否してみせた赤いコップも、りんごも、ネコもねずみも、みんな屈託なく「のせてもらってよかった」という表情で降りていく。それを、K子はもうなにもいわずに、じいっと見送っている。私はその様子をながめながら、「みんなのっていてくれてよかった」「ひとりものるのをあきらめないでいてくれてよかった」としみじみ思った。「姉ちゃんはよし。あんたはだめ」と選別され、切り捨てられ、傷つけられてきたK子なのだ。読みあいの中で、その日K子は、自分を切りつけてきたことばの剣をだれかに、それも力をもたない弱いだれかに、ふりかざさずにはいられなかった。でも、彼女を救ったのは、そんな、彼女が切り捨てたはずの弱い者たちであった。彼らは、どんなことばを吐かれようと、ちゃんと、そこにいた。「おりろ!」と指ではじかれても、なにひとつ疑わずに、「ことばの奥のことばを信じて」K子の汽車に乗り続けた。終点となり、彼らがみんな汽車から降りて、たったひとりで空っぽの汽車を走らせた時、K子は初めて、今までだれかがそばにいてくれたんだということに気づいたのではないか。表面では拒否してみせても、人間はみな、心の奥深い所では、だれかがそばにいてくれることの喜びを感じている。K子がいる、ということがまさしく、その喜びそのものなのだと、伝えたくて伝えられない私は、ただいつまでも、K子といっしょに「がたんごとんがたんごとん」と汽車を走らせ続けた。

実践記録：『かしこいビル』を読む

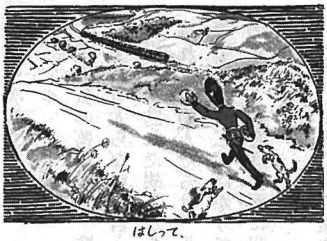
イギリスの作家ウィリアム・ニコルソンが書いた『かしこいビル』（まつおかきょうこ・よしだしんいち訳　ペンギン社）は一九二六年の作品。今から七十年以上も前の作品だ。印刷の技術も今のそれとは異なり、彩色の様子も素朴だが、かえってそれが、斬新にみえる。あらすじは、おばさんから招待状を受け取ったメリーが自分のお気に入りのおもちゃやてぶくろ、ティーポットやブラシをトランクにつめこみ、汽車に乗って出かける。ところがうかつにも、だいじな人形、兵隊さんのビルを入れ忘れ家に残して来てしまう。おでかけを楽しみにしていたビルは溺れてしまうくらいの涙を流して悲嘆にくれる。でも、ビルは、「おきあがって、はって、はしって、ぜんそくりょくではしって」ついに、メリーの乗った汽車を追い越し、ドーバー駅で兵隊さんらしく、敬礼してメリーを出迎える。しかも、おばさんの家に着いたビルは、荷物を開け終わったメリーのトランクの上にあがって、うやうやしく、メリーに黄色の花束を差し出しているのだ。ものがたりの最後のことばはメリーやあしげのアップルや人形のスーザンの称賛を浴びた「かしこいビル！」。かしこいというより、なんともけなげなビルの物語だが、このあまりにも単純なものがたりが、今読書療法を行っている養護施設の中で、ある少女に強い感動と励ましを与えた。そのことを記しておきたいと思う。

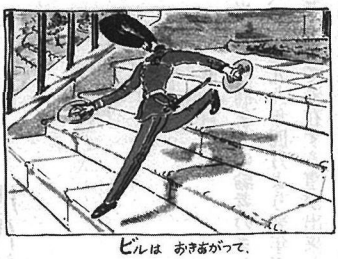
十二歳のU子は昨年秋、入所してきた子である。彼女は、母親と二人、父親の殺害を企てている。事件は未遂に終わったが、父親は全治三カ月の重症を負い、母親は刑務所に入った。U子は母親に共犯を強要されたという背景もあり、保護監察のあと、養護施設に入所してきた。非常におとなしく、こちらからの働きかけには受動的である。自分でものがたりをつくるのが好きで何冊も淡い恋物語を書き連ねている。その夢物語は、彼女の暗く重い生活背景をシャットアウトし、特定のだれかに愛し受け入れられることを仮想する、唯一の逃げ場所のようであった。そこには、家族や現実的な葛藤は立ち現れてこない。はにかみやの少女と、ぶっきらぼうだがやさしくかっこいい少年のパターン化された恋愛があるだけ。

U子に数冊の絵本を読んでみるが、あまり興味を示さなかった。物語として外側から表された孤独にも、怒りにも、ほとんど、無反応である。彼女との面接を重ねながら、極度の貧困と酒飲みの父親が振るう暴力に脅え続けた日々から、ある意味で、やっと解放されたのかもしれない。今が一番安らかな日々なのかもしれないと思う。その反面、これからの課題として、親への不信感と、葛藤が頂点に達したときに「脅え」から「攻撃」へすり変わる刹那の恐怖、そしてなにより、暴力に加担した自分自身をどう許していくかという大

きな課題が残されている。そこと向き合うことなしに、真実の新しい一歩は彼女の中で生まれ得ないだろう。模索しながらの面接の何回目かに『かしこいビル』を読んだ。いつも通り無表情に画面を目で追っていたが「なんと!」「なんと!」の文字だけ大写しの二ページがあり、その次に、置いてけぼりをくったビルの大泣きしている画面が現れると、急に表情が変わった。涙の水たまりをつくって泣き濡れているビルをじいっと見入っている。ビルに対する同情とか、共感とかいうものでなく、ただただその悲しみ、そのとどまることのない涙を、どうすることもできず、見守っているという感じだった。ところが、ページをめくると、思いがけない展開が待っていた。前ページの「でも……」に続けて、次ページをめくると「ビルはおきあがって、」のことば。別人のようにきっぱりと涙をふりきったビルが大股で階段を一段抜かしに駆け降りているのだ。この大展開、大どんでん

返しに「うわぁっ」とU子は感嘆の声をもらした。そして、乗り上がるようにして、本当にうれしそうに、次からの三ページ「はしって、」「はしって、」「ぜんそくりょくではしって、」を復唱した。私の読みの声にかぶさるU子の声は、まるで「シュッシュッポッポッ」という汽笛を連想させた。彼女は、「はしって、」「はしって、」とまるで自分にもいいきかせているかのように、本当に真剣に物語を、ビルのゆく途を、みつめた。いうまでもなく、愛する物に裏切られ、孤立無縁の状態に突き落とされたビルの悲しみはU子のそれと容易に重なるものであったろう。そこで彼女はものがたりの通例、「ビルのことを思い出したメリーちゃんが、かけもどってきてくれる」ことを予測していたはずだ。立ち上がれない彼女を抱き起こしてくれる誰かの出現。その日まで涙の水たまりの中でうずくまっているビル・・・ところがものがたりの中のビルは、U子とは違っていた。彼は、自分のために自分で起き上がり、自分の足で駆


はしって、


ビルは　おきあがって、

け出していった。それは、メリーちゃんのためでなく、自分が幸せであるための決断だった。この決断が彼女に衝撃を与えたことが、よくわかった。それも、ひ弱でちっぽけな「ただの人形」が自分のしあわせのために下した決断だったから。

U子とこの絵本を読みあうまで私はラスト部分でビルがメリーに花束を捧げるその忠義ぶりに納得がいかなかった。（大事なビルを置き忘れてしまうようなご主人になにもそこまで気を使わなくてもいいじゃないか）（必死で野原を抜け、丘を駆け登りながらも、ビルは「花がみつからない」といっていたご主人のために、花まで積んでいたのか）と、腹立たしくさえ感じていたのだ。ところが、U子との読みあいで始めて、この花束にこめられたビルの本当の気持ちがわかった気がした。この花束は単なるご主人へのプレゼントではなく、置いていかれたおかげで、本当の自分の幸せが何なのか、その幸せをつかむためにはどうするしかないのか、そのことを知ることができた、自分の幸せの掴み方を知ることのできた、感謝の花束だったのではないか。そういう気持ちでながめると、ラスト場面、心なしか、ビルの姿が大人びてみえる。「そうかぁー、まいったなぁ」と、読み終わったU子はつぶやき、もういちど初めからページをめくりなおしていた。人が、自分を支えるものがたりと出会うとは、こういうことなのかもしれない。